

村井 順 著

源氏物語評論

株式會社
明治書院

昭和十七年十二月一日印刷
昭和十七年十二月五日發行

源氏物語評論

● 定價金參圓五拾錢

著者

村井

じゆん 順

不許

發行者

東京市神田區錦町一丁目十六番地
株式會社 明治書院
代表者 森下 松 衛

(出文協承認)
(あ130311)



複製

印刷所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
大日本印刷株式會社

印刷者 鈴木 菊藏
(東京二)

發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替東京四九一四七番
電話神田二一四七番

株式會社 明治書院

日本出版文化協會會員番號一三四五〇五番

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

序

村井順君は『源氏物語』に一たびは酔ひ、一たびは醒め、而して今や靜かにその美をめで味はひつゝある若き學徒である。

君は學生時代から『源氏物語』を愛讀し耽讀したが、卒業論文には『源氏』を選んで、思ひ切つて其の缺點を痛撃した。當年審査に當たつた吾々は、相顧みて、『源氏』の攻撃も此の位まで行けば愉快だと云つてその新しい見識を稱へ合つたものである。その後數年を経て、君は雜誌『國文學研究』に卷^{きま}分けの源氏論を連載しはじめたが、今度は前とは打つて變はつて、専ら源氏を褒めちぎつて居るのに驚かされた。思ふに源氏物語は村井君に取つて、一種の許嫁^{いひなづけ}のやうな文學であつたのである。而して是非もなく愛戀した異性が、我がものと極ると、俄に缺點が見えて來るやうに、君の鋭利な批評眼は先づその愛する作の缺點を見出だして、その感じたまゝを正直に告白したのであらう。諺に不肖な子ほど可愛ゆいといふ。愛する

文學の缺點^ちを存分に拾つた後に於いて、君の心に猛然と起つて來たのは『源氏』の長所の再認識であつた。而して再認識の結果の愛着は、盲目の愛ではなくして自覺の伴つた愛であつた、兩端を叩いた上の確乎たる愛であつた。此の念の入つた愛の所産が『國文學研究』に載せた卷分けの研究で、その研究を更に精鍊し潤飾して取纏めたものが本書である。

村井君の批評は根本精神に於いて印象的批評である。けれどもそれは我儘な向う見ずの印象論ではなくして、當の作品を讀みこなし、古今の批評を見較べ、東西の文學論に照らし會はせての印象論である。君の源氏論は必ず在來の源氏論に對して、大いに加ふる所があるであらう。また其の解り易く愛嬌に富んだ文章は必ず多くの讀書子の心を惹くであらう。

此の卷分けの源氏論は、桐壺より「關屋」に至る十六卷、即ち全源氏の約三分の一を取扱つたものである。世には萩原廣道の評釋の「花宴」に至る最初八卷の中斷式結了を始めとして、種々の事情から部分によつて全體を推察せしむる形式のものが

少なくない。村井君の本書も、此の讀切の一巻だけでは、やはり其の類の一つであるが、私は村井君が更に努力一番して、あとの三分の二をも速に起稿して此の折角の良著を完成されんことを希望する。また天下大方の聲援が村井君を奮ひ起たせて、此の好著述を更に立派な完璧たらしめられんことを切望する。

昭和十七年九月十一日

五十嵐 力

目次

序

一、「桐 壺」の卷……………一

一、桐壺更衣(一) 二、光源氏(九) 三、長恨歌との關係(一五)

二、「帚 木」の卷……………二〇

一、品定め(三) 二、作者の人生觀、物語觀(三) 三、發展性のない觀念(三) 四、品定め的女性と他の卷(元) 五、品定めと源氏(元) 六、空 蟬(四)

三、「空 蟬」の卷……………三七

一、一卷の組織に就て(三) 二、光源氏の若さと好色(三) 三、軒端萩の不幸(四)

四、空蟬の悲しみ(四) 五、同型の構想(四) 六、前代文學の影響(五) イ、竹取物語

(五) ロ、落窪物語(五) ハ、宇津保物語(五)

四、「夕 顔」の卷……………五六

序(五) 一、惑はさるゝ源氏(五) 二、惑はす源氏(六) 三、深まる戀(六) 四、變死(六) 五、もののけ(六) 六、夕顔の性格(六) 七、同型の構想(七) 八、宇津保

物語の影響(一六) 九、用語に就いて(一六)

五、「若 紫」の 卷……………八五

一、發見のプロット(八五) 二、源氏と藤壺(八六) 三、源氏と葵上(八九) 四、源氏と紫上(九二) 五、同型の構想(九三) 六、宇津保物語の影響(九六)

六、「末摘花」の 卷……………一〇〇

一、創作態度に就いて(一〇〇) 二、夢を追ふ源氏(一〇一) 三、舞臺的發見(一〇三) 四、戀愛競争(一〇五) 五、發見(一〇七) 六、源氏の溫情(一一一) 七、同型の構想(一一三) 八、前代文學の影響(一二六) イ、落窪物語(一二六) ロ、宇津保物語(一二六)

七、「紅葉賀」の 卷……………一二〇

一、ゆゑしく見ゆる源氏(一二〇) 二、源氏偏愛の傾向(一二四) 三、葵上の場合(一二三) 四、愛情と戀情(一二五) 五、源内侍を繞りて(一二七) 六、同型の構想(一二四) 七、前代文學の影響(一二四) イ、伊勢物語(一二四) ロ、宇津保物語(一二四)

八、「花 宴」の 卷……………一四六

一、朧月夜(一四六) 二、遊戲的な戀愛觀(一二四) 三、主知らぬ戀(一二四) 四、源氏と弘徽殿の確執(一二五) 五、作者の變態的美意識に就いて(一二五) 六、弘徽殿方の不用意(一二五) 七、宇津保物語の影響(一二五)

九、「葵」の巻……………一六二

- 一、車争ひ(二三) 二、生靈(二五) 三、發見のプロット(二六) 四、葵上の冷遇(二七)
五、紫上(二七) 六、同型の構想(二九) 七、前代文學の影響(二八) イ、伊勢物語(二八)
ロ、落窪物語(二八) ハ、宇津保物語(二六)

十、「賢木」の巻……………一八八

- 一、逆境(二六) 二、對比(二七) 三、落飾(二九) 四、破滅(二九) 五、三つの性格(二九) 六、一つの性格(三〇) 七、同型の構想(三〇) 八、前代文學の影響(三〇) イ、土佐日記(三〇) ロ、落窪物語(三〇)

十一、「花散里」の巻……………二二三

- 一、一卷一話と氣分轉換(二三) 二、源氏の厚情(二六) 三、同型の構想(二八)

十二、「須磨」の巻……………二二九

- 一、謫居の理由(二九) イ、源氏の主張(二九) ロ、弘徽殿方の政略(三〇) ハ、村雨事件(三三) ニ、無實の辯(三三) ホ、王朝の社交辭令(三六) ヘ、世相と作者の面影(三一)
ト、雷雨の奇蹟(三五) ニ、同型の構想(三〇) 三、前代文學の影響(三三) イ、竹取物語(三三) ロ、宇津保物語(三四)

十三、「明石」の巻……………二四七

一、怪異の吟味(三四)	二、佳吉の神(三五)	三、明石の戀(三五)	四、宿世思想(三六)
五、歸洛(三五)	六、朱雀院(三六)	七、同型の構想(三五)	八、宇津保物語の影響(三六)
十四、「落標」の卷		二八	九

一、冷泉帝の受禪(三六)	二、源氏の報復(三六)	三、朧月夜の心(三六)	四、家庭に歸つた源氏(三六)
五、佳吉詣(三七)	六、六條御息所の逝去(三七)	七、同型の構想(三七)	八、落窪物語の影響(三七)

十五、「蓬生」の卷		三一	七
-----------	-------	----	---

一、末摘花の窮困(三七)	二、凡てに見放された末摘花(三九)	三、源氏の本心(三九)	四、源氏の救命(三九)
五、傑作の理由(三九)	六、宇津保物語の影響(三九)		

十六、「關屋」の卷		三三	六
-----------	-------	----	---

一、空蟬に對する作者の興味喪失(三六)	二、肉體的愛より精神的愛へ(三七)	三、「關屋」は未完成品(三九)
四、常陸介(三九)	五、空蟬(三九)	六、蜻蛉日記の影響(三九)

附錄「古今和歌集序」と源氏物語		三四	七
-----------------	-------	----	---

源氏物語評論

一、「桐壺」の卷

一、桐壺更衣

「桐壺」の卷は源氏物語五十四帖の、強ひて言へば吾人が正篇と呼ぶ光源氏の雲隱迄、卷にして「幻」迄、四十一帖の發端である。此の卷で、作者は先づ正篇の主人公光源氏を描く前提として、其の生母桐壺更衣の生涯を簡単に讀者に知らしめんとしてゐる。而して作者は此のさまで高貴の身分でない生母に就いては、唯内裡で如何に強く彼女が鍾愛されたか、その愛の強さを讀者に深く印象せしめて置けば、最早彼女には用がないと考へた。そして作者は其の愛の強さ、深さの中から光源氏の生涯を引出し、藤壺なる女性を生れしめようと意圖した。従つて此の卷は二段に分つことが出来る。即ち最初から源氏の生誕、更衣の死、源氏の宮中退出等の事件を経て、光源氏の参内に至る迄を第一段とし、それ以後を第二段と見ることが可能である。そして第一段は第二段の伏線であり、第二段は

以後の卷に對する伏線と考へることが出来る。吾人は先づ第一段から觀て行かう。

作者は冒頭に於いて、

いづれの御時にか、女御更衣數多侍ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬがすぐれて時めき給ふありけり。初めより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ猜み給ふ。同じ程それより下臈の更衣達はまして安からず。

と、從來の物語の書出しに従ひ、出來事が何時の時代に起りしかは、讀者の想像の自由に任せ、以下讀み行くうちに其の時代が自然に判斷出來る様にして置き、女御更衣以下の言葉で、事件は宮中を背景とし、多くの女官を中心として展開して行くことを暗示した。そして多くの女性の中で、一人すぐれて殊寵を蒙つてゐる女を點出した。此の女性こそは正篇の主人公として耽溺的な榮華の生涯を送る光源氏の母なのである。

作者は桐壺更衣の身分はさまで高貴でないが、寵愛は極めて深いと語つた。當時の有閑階級の貴族達の娘が、夢の對象として最も強く憧憬したのは宮廷生活であり、その生活の中でも寵愛を恣にすることであつたらう。思ふに桐壺更衣こそは平安朝の淑女達の夢の實現されたものであらう。然もその更衣の身分が左程高貴でなく、剩へ父を失つた女と聞かされては、下臈の娘の愛讀者達さへも胸を躍らせて、羨むべき此の更衣の將來を見んとしたであらう。或は又我と我身を此の更衣に擬へ、豫ての夢の實現を此の小説に於いてなしつゝ、どんなに愉悅と希望とを持つて更衣の生涯を眺めて行つたことだらう。

けれども「女御更衣數多侍ひ給ひける中に」と書き出した作者は、次に之等女官達の桐壺更衣に對する感情を書かねばならなかつた。宮廷女官の實生活を知つてゐたであらう作者は、此の寵愛を一身にあつめた身分低き更衣に

對する、數多の女官の態度を如何に叙すべきかを、餘りによく現實に見過ぎてゐた。即ち作者は寵愛を一身に專にせる此の幸福なるべき更衣が、あらゆる女官や女官のみでなく殿上人からさへ冷遇され、嫉視されたと描かざるを得なかつた。愛狎されて幸福であるべき更衣も、反面には斯かる苦惱が彼女を憂鬱にした。

前にも述べた如く、桐壺更衣は、殊寵を蒙つたことゝ、その腹から源氏が生れたことを語れば、もはや用のない人物である。作者は彼女を讀者に紹介する最初から既に彼女の死を暗示してゐる。即ち前の引用文に續いて作者は斯く叙べてゐる。

朝夕の宮仕につけても人の心を動かし、怨を負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなり行き物心細げに里がちなるを、いよ／＼飽かずあはれるものに思ほして、人の謗りをもえ憚らせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

桐壺更衣は夕顔型の女性である。更衣は夕顔の如く美しいけれども弱々しかつた。又彼女は夕顔同様極端に愛される男性を持つてゐるが、女性には極端に怨を負ふべく運命づけられてゐた。

かくて程なく此の薄命な更衣の腹から光源氏が生れ出でる。だがその前に、作者は彼女の両親のことを讀者に紹介して置かねばならない。彼女の父は大納言であつたが、今は世に亡く、母は昔の由緒ある家柄であつた。かういふ身分であつたから、彼女は平生はひげ目を感じなかつたが、何か改まつた事のある場合には、矢張り片親のない心細さを感じねばならなかつた。續いて源氏の生誕が叙べられる。

前の世にも御契や深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。何時しかと心もとながらせ給ひて忙ぎ參らせて御覽するに、めづらかなる兒の御かたちなり。

源氏の美しさは既に生誕から叙べられてある。が然し何と言つても、まだ産れたばかりの嬰兒である。源氏が如何なる人物であるかは今後の筆に待たねばならぬ。次ぎに作者は、子供と言へばまだ外の腹にもあると云つて、一の御子に就いて語り、だがその子よりも源氏は掌中の玉と可愛がられたと云つて、帝が源氏を殊寵される伏線を叙べ、第二回目の桐壺更衣愛寵の有様を叙してゐる。

作者は冒頭に更衣を紹介して、「いとやむごとなき際にはあらぬが」と言つた。そして更衣が他の女官から輕蔑された原因を彼女の低い身分に置いた。かういふ第一印象を持つて讀んで行かれては、これから叙べようとする一代の理想的人物光源氏にまで惡影響を及ぼすであらう。作者は此の印象を破壊する爲に、源氏の出生直前に、更衣の家柄を具體的に説明して置いたが、更に更衣鍾愛のことを叙する第二回目にも、

母宮初めよりおしなべての上宮仕し給ふべき際にはあらざりき。覺えいとやむごとなくじゅうすめかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御遊の折々、何事にも故ある事のふし／＼にはまづ參うのぼらせ給ひ、或時は大殿籠り過してやがて侍はせなど、あながちに御前去らずもてなさせ給ひし程に、おのづから輕き方にも見えしを、此の御子生まれ給ひて後はいと心殊に思ほしおきてたれば、坊にもようせずは此の御子の居給ふべきなめりと一の御子の女御はおぼし疑へり。

と、御愛寵が餘りに甚しい爲に、自然更衣の身分が輕々しく見えたことわりながら、反面御愛狎の特別であつたことを思はせ、源氏が生れた爲に一層御愛寵の程が増したと語り、又今後源氏と並んで勢を爭ふ弘徽殿女御が、帝の源氏御愛が目に餘るので、うつかりしてゐては、源氏が春宮に立つかも知れぬといふ疑念を抱いたと付け加へて置く。そして二度目の更衣病死の暗示をする。

かしこき御蔭をば頼み聞えながら、貶しめ疵を求め給ふ人は多く、我身は、かゝる物は、かなき有様にて、なかなかなる物思をぞし給ふ。

更に作者は筆を進めて、此のか弱くたよりない更衣が、如何に女官達から虐げられ、爪弾きされたかを、實例をもつて細叙してゐる。がその事件を描くに先立つて次の様に、作者自身が批評を下してゐる。

御局は桐壺なり。數多の御方々を過ぎさせ給ひつゝひまなき御前渡りに、人の御心を盡し給ふもげに、ことわりと見えたり。

作者の此の自評は高所から人々の心を觀て描いたもので、此處に作者の現實主義が在る。作者は決して江戸時代の戯作者の様に人の性格を善玉惡玉式に描いてゐない。吾人が源氏物語の偉大な點として推賞する一面は、作者の此の全面的と言はうか、創作上の現實主義と言はうか、兎に角物の觀方が公平であつて一方に偏してゐないといふ點である。紫式部といふ人は決して物を一元的に考へることの出来ない人であつた。一方だけを善として、他方を惡と言ふ風に考へることの出来ない人だつた。これは源氏物語を讀む上に於いて極めて肝要なことである。

然るに萩原廣道は「げにことわりと見えたり」といふ語の評に於いて「此の語は作者の自評也、更衣の時めき給ふ様を強く聞かせたる筆使いといひみじ」と評してゐる。成程此の場合だけについて考へると、さういふ風に文章上の功利主義から、更衣の時めき様を強く響かす爲に書いた様に考へられるが、しかしそれは表面的な觀察に過ぎない。廣道の觀察の間違つてゐることについては、更衣の歿後贈位の條、及び帚木の卷に於いて改めて述べることにする。

それから作者は筆を轉じて源氏の袴着の事を語る。此の折にも源氏の超人間的な美しさを語る事を作者は忘れた

いで「物の心知り給ふ人は、かゝる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かし給ふ。」と叙べてゐる。

源氏袴着の年の夏、更衣は遂に病みて再び起つ能はず、宮廷を退出するや病勢俄に革り急逝した。更衣が宮廷を退出する折、別れを惜む場面は實に哀切讀者の腸を抉るものがある。寵愛を一身に專にした更衣は天逝し、宮廷退出の別離は一變して永劫の別離と變じた。この折の御悲嘆は察するに餘りあるが、更に源氏が喪に籠る爲に退出せねばならなくなつて、御痛嘆は其の極に達する。更衣が退出する折に、源氏だけを内裡に残して置いたといふことや、又喪の爲に源氏が退出するといふ様なことは、帝と更衣の物語を語る上には微々たる事柄で、そんなことは叙べなくともよいのであるが、然し全篇の序篇としての此の卷に於いては實に重大なことである。即ち正篇の主人公源氏を讀者に印象づけんが爲、今迄の中心人物たる桐壺帝と更衣から讀者の注意を徐々に去らしめて、源氏に向けしめんが爲に斯様なことを描いたのである。

吾人はさきに更衣と夕顔とは同型の人物であると述べたが、更衣葬送の場面に於いて、更衣の老母が「空しき御骸を見る／＼尙おはするものと思ふがいと申斐なければ、灰になり給はむを見奉りて、今は亡き人とひたぶるに思ひなりなむ。」と頼んで葬送に列したが、行つてみると悲しみの爲車から落ちんばかりに泣き惑うたといふ場面と、「夕顔」に於いて夕顔葬送の折、源氏が「びんなしと思ふべけれど、今一度彼の亡骸を見ざらむがいといふせかるべきを、馬にてもものせむ」と惟光に頼んで、葬送に忍んで行つて、悲嘆の餘り落馬して惟光を途方に暮れさせた事件とは相似てゐる。もとより夕顔の此の場面は更衣葬送の場面とは比較にならぬ程に優れた場面であるが、しかしその気分は更衣のそれから進化したものと考へてよいと思ふ。

さてそれから葬送の場所へ勅使が来て、更衣は三位を追贈された。その折の叙述が又大切である。

これにつけても憎み給ふ人々多かり。物思ひ知り給ふは様かたちなどのめでたかりしこと、心ばせのならかに目安く憎み難かりし事など今ぞ思し出づる。様惡しき御もてなし故こそすげなう猜み給ひしか。人柄のあればに情ありし御心をうへの女房なども戀惚びあへり「なくてぞ」とはかゝる折にやと見えたり。

作者の創作態度が善玉惡玉式の型にはまつたものでないことは前にも述べたが、此の叙述を見ても、萩原廣道の言ふが如き作の効果の上からの筆でないことが判ると思ふ。作者の創作態度は全面的である、全身的である。作者は決して江戸時代の戯作者の如く、下等低劣な創作上の功利主義に没頭してゐない。作者は人間性の核心を強く捉へて、それを描いてゐるのである。作者は強い者や評判の好い者だけに味方して、弱い者や不人気な者に冷淡である様な人間では決してない。又作者は世の中を白だけとか、黒だけとか言つた、傾いた偏したものに見るべく餘りに賢明な頭惱を持つてゐた。白も黒も赤も青も雜然混然と入交つてゐる人間世相を、作者は餘りに強く認識してゐた。それを歪曲して描くことは到底出来ぬ程に。

却説、今迄餘りに事件の追求にのみ筆を注いだ作者は、茲に轉じて歎負の命婦が更衣の母を訪れるといふ、詩的哀愁に包まれた餘裕ある場面を斷出した。此處は「桐壺」の中、最も情趣に富んだ箇所である。即ち季節は野分の吹き初むる頃、然も夕暮時である。獨暮しの佗住居は八重葎の伸びるに任せ、その上を月影は靜に照してゐる。北方と命婦は、此の寂寥たる背景の中で、故人を偲びて袂も袖も絞るばかりに泣き咽ぶのである。又命婦はその會話の中で、おほやけも更衣追憶の涙に目夜暮れさせ給ふ由を語つてゐる。誠に更衣は亡き跡まで人々の胸を塞いで晴れしめない女性である。此所で特に吾人の注意しなければならぬことは、此の會話の中に宿命論者としての作者の